

「草木国土悉皆成仏」の言葉に関わりを持つ能

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学通信教育部 公開日: 2025-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 末光, 里枝子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000652

「草木国土悉皆成仏」の言葉に関わりを持つ能

末 光 里枝子

はじめに

「草木国土悉皆成仏」という言葉は、能においてよく見聞きする仏語の一つである。「一樹の蔭に宿り一河の流れを汲むも、みなこれ他生の縁」「和光同塵」とともに能を通観して繰り返されることの最も多い句としてあげられることもある¹。この言葉は日本仏教、主として天台宗本覚思想において深化・熟成された。一乗平等悉皆成仏の教義が非情の草木国土にまで及ぶとする言葉で、中世能楽の世界において詞章として表され、現代の能に残されてきた。

本稿では「草木国土悉皆成仏」という句を観点として能の作品群を捉え、「草木国土悉皆成仏」の句と能との関わりについて考察する。

1. 先行研究

仏教思想と能との関わりについては、多方面からの研究がある²。姉崎正治氏は謡曲における仏教要素は「平安伝統の芸術的宗教又は宗教的芸術の遺産」³であるとして、真言仏教修法密儀、法華思想・法華経尊信、阿弥陀仏の信仰唱名念仏、両部神道山伏修験道をあげられ、その境界線は多くの場合明晰にしにくいと述べられている⁴。仏教関係の謡曲の分類として、花田凌雲氏はさらに観音信仰、龍神思想、神仏本迹一体の思想などをあげ、概要を捉えられた⁵。近年は禅的思想、天台本覚思想の及ぼした影響について多くの言及がある。香西精氏は世阿弥の納帳が発見された補厳寺が禅寺でありその第二代竹窓智厳が道元の法孫であることから、世阿弥と曹洞宗との関係性について明らかにされ、禅語の能の詞章に及ぼした影響についても卓見を示された⁶。西尾実氏は、世阿弥の能芸論や能作品に禅の言葉が多く用いられていること、芸道稽古の道筋が道元の仏道修証と相似していることなどから、禅的思想と

の関わりが強いことを確認された⁷。天野文雄氏は禅的環境について足利義満、義持の及ぼした影響について言及されている⁸。三崎義泉氏は世阿弥作の能本には多くの本覚思想の常用語が使われており、能の描くドラマは妙法であると述べられ、世阿弥と天台本覚思想との関わりを検証されている⁹。また、草木成仏思想の受容については、「世人にはやはり“草木成仏”という考え方や見方が広まっていく。歌を詠むとき、あるいはふと目を転じたとき、草木を見つめる人の心にしだいにこの思想が浸みこんでいったようである」¹⁰といわれる。

草木成仏思想並びに「草木国土悉皆成仏」の偈については、末木文美士氏の研究に詳しく示されている¹¹。また、この偈とその成り立ちについて、先鞭をつけられたのは宮本正尊氏の研究である¹²。宮本氏は「草木国土悉皆成仏」という句は、能〈墨染桜〉では中陰経の妙文にあるとして典拠が『中陰経』に求められているが、実際には「草木成仏の妙文を含む中陰経は、草木国土の亡霊得脱を仏教の中陰信仰に結びつけた日本の創作であって、偽経に他ならないのである」¹³と述べられている。さらに「一仏成道観見法界草木国土悉皆成仏」の偈が、そのまま宝地房証真の『止観私記』に「中陰経伝、一仏成道、観見法界、草木国土、悉皆成仏。身長丈六、光明遍照、其仏皆名、妙覚如来」¹⁴とあることを起点に、遡って「草木国土悉皆成仏」の偈の作者を検討する。『中陰経』の説として草木成仏を語るのは五大院安然からで、ここが「草木国土悉皆成仏」という標語の草創時代との認識をしめされる¹⁵。

草木成仏思想について、また仏教思想と能との関わり、草木成仏思想が能に取り入れられていることについての研究は多岐にわたりみられる。しかし、草木成仏思想とかかわる能の全体像については不明瞭な部分が多く残されている。ここでは草木成仏思想にかかわる能を一群としてとらえ、その中でどの

ような特徴変容が見られるのかを、「草木国土悉皆成仏」の偈との関わりを中心に捉えていくこととする。

2. 「草木国土悉皆成仏」の句と関係性を有する詞章を持つ能

本稿では「草木国土悉皆成仏」の句がそのまま詞章に取り入れられている能、あるいは部分にわけられた言葉が取り入れられている能、草木や国土など非情の成仏に関わりがある能と関係性を有する能とした。「草木国土悉皆成仏」の句、並びにそれに準じる詞章のある能は、『謡曲大観』において29曲が確認できる。『謡曲大観』には観世・宝生・金春・金剛・喜多のシテ方五流の現行曲235曲が所収されているが、29曲中の3曲にあたる、〈墨染桜〉〈雪〉については金剛流、〈佐保山〉については金春流のみに伝わっている。

以下はその29曲である。ここでは「草木国土悉皆成仏」の句に関わる言葉の部分のみをひく。〈 〉には謡曲名を、()には後シテ／前シテ、ワキを、その次に主な場を記した。本稿で引用した詞章の表記は『謡曲大観』本文の表記に合わせた。「、」「。」の表記は用いず、字間のアキで示した。曲節型・吟型は典拠の「『』」に準じて「\」で表した。シテ・ワキ・地謡など役名表示は略したが、必要な場合は典拠に準じて表記した。引用のつど『謡曲大観』の巻数と頁を〔 〕内に示した。

〈采女〉（采女／里女、旅僧）春日の里。
草木国土成仏の 神木とおぼし召し 〔一、400頁〕
\もとよりも人々同じ仏性なり 何疑ひも波の上
\水の底なる鱗類や \乃至草木国土まで \悉皆
成仏 \疑ひなし \ましてや 人間に於いてをや
〔一、406頁～407頁〕

〈杜若〉（杜若の精、旅僧）三河の国八橋。
皆発心説法の妙文なれば 草木までも露の恵の \
仏果の縁を弔ふなり 〔一、624頁〕
すはや今こそ 草木国土 悉皆成仏の御法を得てこそ
〔一、628頁〕

〈春日龍神〉（龍神／宮守の翁、明恵上人）春日の里。

春日の野山金色の 世界となりて草も木も仏体となるぞ 不思議なる 〔一、677頁〕

〈熊坂〉（熊坂長範／僧、旅僧）美濃の赤坂。
ありがたや 回向は草木国土まで 漏らさじなれば
わきてその 〔二、935頁〕

〈現在七面〉（龍女／里女、日蓮上人）身延山。
\なかなかの事草木国土 悉皆成仏の法華経なれば
〔二、1016頁〕

〈胡蝶〉（胡蝶の精／里女、旅僧）都の古跡。
\ありがたやこの妙典の功力に引かれ 有情非情も
隔てなく 仏果に到る花の色 〔二、1150頁〕

〈西行桜〉（老桜の精／老桜の精、西行上人）京都の西山。

草木国土 おのづから 見仏聞法の 結縁たり
〔二、1171頁〕

凡そ心なき草木も 花実の折は忘れめや 草木国土
悉皆成仏の御法なるべし 〔二、1176頁～1177頁〕

〈佐保山〉（佐保姫／里女、藤原俊家）大和の国春日の佐保山。

山海草木に至るまで 万物悉く成仏して 〔二、1272頁〕

〈舍利〉（足疾鬼／里人、旅僧）出雲の国美保の関。
げにや鶯の御山も 在世のみぎんにこそ草木も法の
色を見せ 皆仏身を得たりしに 〔二、1390頁〕

〈墨染桜〉（墨染桜の精／里女、上野峰雄）山科深草仁明天皇陵。

あらありがたの御経やな \草木国土悉皆成仏 \
げに頼もしやこの文は 中陰経の妙文 \尊やわれ
こそ草木国土に 色香を見せて花の名の \深草野
辺の墨染桜 〔三、1511頁～1512頁〕

仏の縁をうけつぎて 草木も成仏の 御法ぞ嬉しかりける 〔三、1513頁〕

〈西王母〉（西王母／仙女、王）周の穆王の世。
四季折々の時を得て 草木国土おのづから 〳皆こ
れ真如の花の色香 [三、1570 頁]

〈殺生石〉（野干／里女、玄翁上人）下野的那須野。
〳木石心なしとは申せども 草木国土悉皆成仏と聞
く時は もとより仏体具足せり 況んや衣鉢を授く
るならば 成仏疑ひあるべからずと [三、1643 頁]

〈道明寺〉（白大夫神／老翁、尊性）河内の国土師
の里道明寺天満宮。
げにありがたや草も木も 皆成仏の木の实まで
[三、1832 頁～1833 頁]

〈当麻〉（中将姫の霊／老尼、旅僧）当麻寺。
草木国土成仏の 色香に染める花心の 〳法の潤ひ
種添へて 〳濁りに染まぬ蓮の糸を [三、1845 頁]

〈定家〉（式子内親王の霊／都の女、旅僧）時雨の
亭。
〳一味の御法の雨のしたたり皆潤ひて草木国土 悉
皆成仏の機を得ぬれば 定家葛もかかる涙も ほろ
ほろと解けひろければ [三、2115 頁～2116 頁]

〈知章〉（平知章／里人、旅僧）須磨の浦。
〳草木国土 有情非情も 悉皆成仏の 彼の岸の海
際に 浮かみ出でたるありがたさよ [四、2247 頁]

〈巴〉（巴御前／里女、旅僧）近江の粟津。
今は浮かまん御法の功力に草木国土も成仏なれば
[四、2283 頁]

〈鶴〉（鶴／舟人、旅僧）摂津の芦屋。
〳一仏成道観見法界 草木国土悉皆成仏 〳有情非
情 皆俱成仏道 [四、2389 頁]

〈野守〉（鬼神／野守の翁、羽黒山の山伏）春日の
里。
〳土砂 山河草木も 〳一仏成道の法味に引かれて
〳鬼神に横道曇りなく 野守の鏡は 現れたり
[四、2432 頁]

〈放下僧〉（小次郎の兄／小次郎の兄、利根信俊）
瀬戸の三島。

大小の根機を嫌はず 持戒破戒を選はず 〳有無の
二偏に落つる事なく 皆成仏するためしあり 〳か
るが故に草木も法身の姿を現し 〳柳は緑花は紅な
る その色々を現せり [四、2448 頁]

〈半部〉（夕顔女／里女、僧）京都の紫野。
一乗妙典の題目たり この結縁に引かれ 草木国土
悉皆成仏道 [四、2499 頁]

〈芭蕉〉（芭蕉の精／女、山居の僧）唐土楚国の瀟
水。

あらありがたやこの御経を聴聞申せば われ等如き
の女人 非情草木の類までも頼もしうこそ候へ
[四、2534 頁]

一切の非情草木の類までも 何の疑ひの候べき
[四、2535 頁]

草木成仏の 〳いはれをなほも示し給へ 〳菓草喻
品あらはれて 草木国土有情非情も 皆これ諸法実
相の 〳峯の嵐や 〳谷の水音 〳仏事を為すや
[四、2535 頁]

柳は緑花は紅と知る事も ただそのままでの色香の草
木も 成仏の国土ぞ成仏の国土なるべし [四、2536
頁]

非情草木といつば真は無相真如の体 一塵法界の心
地の上に 雨露霜雪の 形を見す 〳然るに一枝の
花を捧げ 〳御法の色を顕すや 一花開けて四方の
春 のどけき空の日影を得て楊梅桃李数々の 〳色
香に染める 心まで 〳諸法実相 隔てもなし
[四、2541 頁]

〈藤〉（藤の精／里女、旅僧）越中多祇の浦。
今こそ悟りの開くる 心の花なれや されば非情の
草も木も 成仏ここに荒磯海深きは法の 道ぞかし
[四、2731 頁]

〈仏原〉（仏御前／里女、旅僧）加賀国仏の原。頼
もしや一仏成道 〳観見法界 〳草木国土 〳悉皆
成仏と聞く時は 〳仏の原の草木まで 仏の原の草
木まで みな成仏は疑はず ありがたや折からの
野もせにすだく 虫の音までも声仏事をやなしぬら

ん 山風も夜嵐も 声澄み渡るこの原の草木も心
あるやらん [四、2791 頁～2792 頁]

〈身延〉（里女、日蓮上人）身延山。
身延の山の風の音 水の声もおのづから諸法実相と
響きつつ 草木国土悉皆成仏の霊地なりけり [五、
2955 頁]

〈六浦〉（楓の精／里女、旅僧）相模の国六浦の称
名寺。
草木国土悉皆成仏の この妙文を疑ひ給はで [五、
3015 頁]

〈雪〉（雪の精、旅僧）摂津国野田の渡。
言葉を交はすもただこれ法の 功力を疑ひ給はずし
て とくとか成道なり給へ [五、3188 頁]
あらありがたの御事や 妙なる一乗妙典を 疑ふ心
はあらかねの 土に落ち身は消えて 古事のみを
思ひ草仏の縁を結べかし [五、3188 頁]

〈遊行柳〉（老柳の精／老翁、遊行上人）陸奥白河の
関付近。
御法の声は草木までも 成仏の縁ある結縁たり
[五、3195 頁]
功力に引かれて草木までも 仏果に到る [五、
3200 頁]
御法の教へなかりせば 非情無心の草木の 台に至
る事あらじ [五、3201 頁]

〈弱法師〉（俊徳丸／俊徳丸、高安通俊）河内天王
寺。
花もさながら施行ぞとよ 土にかなかのこと草木国
土 悉皆御法も施行なれば 土に皆成仏の大慈悲に
土に洩れじと施行に連なりて [五、3320 頁～3321
頁]
晋き誓ひ満潮の おし照る海山も皆成仏の姿なり
[五、3323 頁]

3. 草木成仏をあらわす詞章の分類

「草木国土悉皆成仏」の句は一まとまりの言葉と
して印象に残るが、この句をそのまま使うものだけ

ではなく、この句の言葉を言い換えて使われている
ものもある。

29 曲を「草木国土悉皆成仏」の句の言葉の言い
換え方で分類してみると以下ようになる。

A 類「草木国土悉皆成仏」の意味を含んでいる もの

(1) 「草木国土悉皆成仏」そのままの形で、詞章の
中に使われているもの

〈定家〉〈殺生石〉〈杜若〉〈半部〉〈采女〉〈知章〉
〈現在七面〉〈仏原〉〈鶴〉〈六浦〉〈墨染桜〉

(2) 「草木国土」だけをひいて、後半を別の語につ
なげるもの

〈弱法師〉〈当麻〉〈巴〉〈西行桜〉〈熊坂〉〈西王
母〉〈身延〉〈芭蕉〉

(3) 「草木国土」を言い換えるもの
〈野守〉〈佐保山〉

B 類「国土」の意味を含まず、「草木成仏」の意 味を含んでいるもの

(1) 「草木」「成仏」の語が詞章の中に使われている
もの

〈遊行柳〉〈藤〉〈道明寺〉

(2) 「草木」に成仏の意の別の語をつなげるもの
〈放下僧〉〈舍利〉〈春日龍神〉

C 類「草木」「国土」「成仏」の語を用いていな いもの

〈胡蝶〉〈雪〉

3.1 A 類について

A 類は 21 曲を数え、29 曲全体の 72.45% に及ぶ。

草木成仏思想は天台宗に限らず鎌倉仏教において
は、日蓮に重要視され、親鸞、道元においても認めら
れた¹⁶。空海においては、密教的アプローチから草
木成仏思想についての先駆的な位置をしめる。花野
充昭氏は「日本仏教においては、それが安然的であ
れ、覚運的であれ、草木の発心修行成仏を認める説
が主流であった。真言宗・日蓮宗は言うまでもなく、
このことは鎌倉中期以降の天台宗についても云え
る。」¹⁷と述べられている。これら多方面に及ぶ草木
成仏思想の中において、国土の言葉も含めるこの句

は、「日本天台の草木成仏説が成熟し「草木国土悉皆成仏」の妙文も創作された」¹⁸という出自をとる。

A類はこの日本天台由来の「草木国土悉皆成仏」という句の影響下にあり、能においてはこの句を通して草木成仏思想が解され、詞章への受容が進んだと考えられる。

3.2 B類について

B類は、「草木国土悉皆成仏」という一まとまりの言葉は使わず、「草木成仏」の言葉だけで詞章を構成している。草木が成仏するという字句通りの意となる。成仏という語は使わず、「法身の相」「法の色を見せ、皆仏身を得たり」「仏体となる」など、独特の表現がみられるものもある。

B類に「国土」の詞章がないことは「草木国土悉皆成仏」句を能の詞章に取り入れる際の省略や工夫の結果であるのか。あるいは「草木国土悉皆成仏」句とは関係がなく、そこを離れての草木成仏思想の影響下で創作されたものであるのか。次に、これらの可能性について検討する。

〈道明寺〉は木櫓樹の実にかけて「草も木も皆成仏」と表し、対象が実に限られ国土に言及する必要がない。

〈放下僧〉は、禅問答において草木成仏があげられたもので、草木成仏の思想がこの能の主題テーマに関わっているとは言えない。草木成仏が禅僧としての教養の表れとして仇を油断させるために使われている。

〈舍利〉においては、釈迦在世の時草木が成仏し仏身を得たことをいう詞章があり、「一仏成道観見法界」という草木国土悉皆成仏の句の前提条件が窺える。

〈春日龍神〉においては、この句を直接ひいている詞章はないが、草木が成仏する姿を描きだし、そこで使われる「仏体」という表現は「草木国土悉皆成仏」句の偈文にある「身長丈六」の仏の姿とかかわりがあると考えられる¹⁹。

〈遊行柳〉〈藤〉はどちらも草木の精をシテとする精魂物であり、〈遊行柳〉は観世太夫音阿弥の第七子にあたる観世信光（1435～1516）の作出²⁰、〈藤〉は江戸中期の作出²¹である。「草木国土悉皆成仏」の句に関わる能としては後期に位置する作者や時代

の作品であり、先行する〈西行桜〉など精魂物の作品の影響を受けて制作されていると考えられる。

B類を概観すると以上ようになり、「草木国土悉皆成仏」の偈の影響は少なからずあり、直接的ではないが大きく包み込んでいると考えられる。その中で「草木国土悉皆成仏」の句の受容の可能性が低い能としては〈放下僧〉があげられる。この能では、草木成仏思想受容の端緒として「草木国土悉皆成仏」の句が謡われることはなく、「草木も法身の姿を現し」と表現される。草木成仏は芸尽くしの一つのように、禅僧の知識の一端として披露され、禅的世界観の色彩が濃い中でその教義が開示される。ここからは、草木成仏思想が僧侶の知識として当時の常識と考えられていたこと、その知識は僧侶以外の一般の人々にも及び、理解の共有化がすすんでいたことが窺える。

3.3 C類について

C類の能においては、草木成仏の応用がさらに進んでいる。しかし、C類の作品のシテは蝶や雪の精である。ここにおいて、これらの能作品におけるシテの成立の立脚点が「草木国土悉皆成仏」の偈の範疇に再び戻ってきた感が否めない。草木成仏が草木の成仏に焦点を当てているのに対し、「草木国土悉皆成仏」の偈はその範疇を草木だけに限定するものではない。「草木国土悉皆成仏」の「国土」は教義において、土砂瓦礫を意味する。「草木国土悉皆成仏」という偈が意味する本来の範疇を理解し、草木にとどまらず、国土万物、万象へと設定の範囲を広げている。蝶や雪の精の作出の発端には「草木国土悉皆成仏」の偈の影響があり、そこにおいて工夫応用がなされたと考えられる。

〈胡蝶〉は梅を始め草木との縁、〈雪〉は土との縁という草木国土との縁を成仏への手立てとしている。また成仏の根拠として、妙典の功力を頼むところが両曲に一致している。「草木国土」の言葉を出さずとも、それとの縁を言い、「成仏」の言葉を出さずとも成仏の根拠として「妙典」を挙げている。草木国土に縁のあるシテを設定する発想や草木成仏が成立する手立て根拠において、〈雪〉は〈胡蝶〉に一致する点が多く、その影響を受けていると考えられる。

4. 偈文に忠実な捉え方として

「一仏成道観見法界」につながる能

「草木国土悉皆成仏」の句は「一仏成道観見法界草木国土悉皆成仏」という偈文の中の一句である。「草木国土悉皆成仏」の句にかかわる詞章を持つ29曲の中で、「一仏成道観見法界草木国土悉皆成仏」という句をひく能は〈仏原〉と〈鶴〉の2曲である。また、〈野守〉は「一仏成道」という部分のみをひいている。「一仏成道観見法界草木国土悉皆成仏」は、『中陰経』における妙文として、次のように記される。

中陰経云。一仏成仏観見スルニ法界ヲ。草木国土悉ク皆成仏ト。身ノ長丈六ナリ。光明遍ク照悉ク能ク説法ス其仏皆名妙覚如来云云経云。²²

「草木国土悉皆成仏」だけでなく、「一仏成道観見法界」をもひく曲は、より正確に『中陰経』の偈文を典拠としているといえる。

草木成仏について大きな論点となったのが、草木成仏の根拠として自ら発心修行して成仏する自性と、仏の成仏に伴われて環境の一環として成仏するという依正不二の問題である。教理的解釈が多岐にわたり幾度となく論じられた。「一仏成道観見法界」という前段の句を伴わず、「草木国土悉皆成仏」という後半の句だけで謡われれば、一仏が成道した時という時間的場所的限定がなくなり、全ての草木国土が悉く成仏するという自性の捉え方が肯定されている、とみることにもできる。また、「一仏成道」を前提とすれば「一仏成道」に伴われて、草木国土は成仏するという依正不二による捉え方といえる。語句をつながりとして解釈をすれば、「一仏」が「成道」し、その悟った立場で「法界」を「観見」すれば、草木国土は悉く成仏している、との意なる。

29曲においてこの2曲は、「草木国土悉皆成仏」の句のみならず、偈文前半の「一仏成道観見法界草木国土悉皆成仏」の文言を詞章に移しとっており、より忠実に偈文を踏まえる姿勢で作能されている。また〈野守〉は、「観見法界」の言葉はないが「一仏成道」を詞章とする、29曲中唯一の能である。詞章の言い替えや省略が際立っており、特色のある

曲になっている。あわせて検討する。

4.1 〈仏原〉

〈仏原〉において「草木国土悉皆成仏」の教えは、今だ、迷悟の境をさまようシテの仏御前がすがる成仏へのてがかりとして謡われる。「一仏成道観見法界草木国土悉皆成仏」ときけば、この仏の原の草木までも成仏は疑いないとして、野原の虫、山風、夜嵐、草木を法身説法する心あるものと謡う。『中陰経』の偈文が詞章にひかれ、それを意味通りに取れば、草木の自性発心による成仏を描き出すことは難しいのではないかと思われるが、そこに関わることなく、「草木国土悉皆成仏」の具体的な姿として、現実の野原の風物は法身説法をしていると捉えている。

シテ仏御前の女人成仏への根拠として、この偈がとりたてて謡われているが、そこにおいて草木の成仏の姿も併せて感受されている。

4.2 〈鶴〉

〈鶴〉において、この『中陰経』の「一仏成道観見法界草木国土悉皆成仏」の偈は一続きとして、より忠実に正確に解釈され、一曲の中に溶け込み使われている。

〈鶴〉において主人公というべきシテは、鶴の亡心である。身は閉じ込められ、心は盲亀の浮木であると、『涅槃経』『法華経厳王品』の言葉をひき²³、ただ暗中に漂う埋もれ木が埋もれ果てないように亡心のみが残り、舟人の姿となって、僧の前に現れる。この鶴は、頭は猿、尾は蛇、足手は虎、鳴く声は鶴に似た変化の者で、仏法王法の障りとなって、王城近くに遍満し、夜な夜な御殿に飛び下って天皇を悩ませ、怯えさせ、魂消させた。それにより頼政に弓で射落とされ、猪の早太に切り裂かれて、うつぼ船に閉じ込められて流されたという。後場となり、御法の声である浦浪が、万物は真実の相の顕れであり、悟りの道は広く開いているから、仏法を受けなさいと響く中、本性を現した後シテの鶴に対し、次のように謡われる。

ワキ \一仏成道観見法界 草木国土悉皆成仏

後シテ 〳有情非情 皆俱成仏道
ワキ 〳頼むべし
シテ 〳頼むべしや
地 〳五十二類も我同性の 涅槃に引か
れて 真如の月の夜汐に浮かみつ
つこれまで来れり ありがたや²⁴

鶴は生きている時には悪心の塊で、自ら発心する、修行する、などとは無縁の存在である。成敗されてうつほ舟にこめられ、今亡心となり、波に漂っている。万象が法身説法するという世界は本覚思想でいえば、顕在的相即論²⁵の世界観の現れといえる。ここにあらわされる鶴は本覚思想の世界に漂い、真如の月に照らされ、草木国土悉皆成仏を頼みとする。草木成仏思想はここでは自性依性を超え、本覚思想の世界観により他力に充ち、鶴という悪心外道の成仏を導き出そうとしている。

謡曲ではこの「草木国土悉皆成仏」の偈にまつわり草木成仏が取り上げられるが、やはりこの偈の本来は、「一仏成道観見法界草木国土悉皆成仏」と一続きであり、「一仏成道観見法界」を前提としていえると考えられる。この一仏を釈迦と捉えると、この偈における草木国土は釈尊が悟りを開いたその時、悉皆成仏したとなり、観見において法界を見れば、草木は既に成仏していると捉えられる。悉皆とはすべての一切万有なのか、それとも、観見した法界がこの悉皆の語にかかり、観見した法界の範囲での悉皆と捉えれば、悉皆の範囲は限定されることになる。しかし、一即一切の見方によれば、全ての万有は成仏したと捉えることができる。この〈鶴〉では「五十二類も我が同性」として、悉皆への手立てとしている。この五十二類は釈迦の成仏に伴われて、ともに成仏した者たちのことであるから、〈鶴〉は、正確に一仏成道の思想をひいているといえる。しかし、この鶴が、五十二類の内に入るのかという疑問が残る。五十二類に悪心変化の者は含まれるのか、という疑問である。これについては、天台本覚の教理は、悪も含めての万有の成仏を捉える立場に立っている。「鶴」では、悪心外道のものであるシテに「その一念をひるがえし、浮かむ力となり給え」²⁶と僧が説き、「沈むは浮かむ縁ならめ」²⁷と応じる。この浮かぶ力という根拠を提示して悪の成仏をあらわ

している。

成仏しがたい究極の相として捉えた鶴についての謡曲的成仏観を見たが、〈殺生石〉でもあまりの悪念はかえって善心に立ち返りやすいという考えが示され、悪心化生の成仏にこの句が謡われる。

4.3 〈野守〉

この曲において「草木国土」の句は「土砂、山河草木」とより具体的に言い換えられ、すべてのものが成仏する有難い教えの根拠として、「一仏成道」の語を続ける。「観見法界」を省いて「一仏成道」に続けることで、「一仏が成道すると、すべての物がその徳を受ける」²⁸の意となり、その妙味にひかれて野守の鏡は現れたと筋の展開の根拠としている。「一仏成道観見法界草木国土悉皆成仏」の意をよく理解咀嚼しての独創的で巧みな詞章の提示となっている。この偈が能に受容され、詞章の工夫構成の中で、より高度に変容されていることが読み取れる。この曲において「草木国土」の句は土砂山河草木と、より具体的に正確に言い換えられ、「悉皆成仏」はその根拠として「一仏成道」の語をひき、妙味にひかれて現れる、と続けられる。〈鶴〉にみた「一仏成道」を五十二類にひいて理解をあらわす詞章に比すと、理解について軽い扱いのように見えるが、〈鶴〉におけるテーマ主題が鶴の成仏にあったのに対しここでは野守の鏡の出現への手立てなので、この軽い扱い、省略によるあしらいは巧みで、軽妙洒脱であると考ええる。

「草木国土」の国土について仏教教理と同じように石、瓦礫と解釈された詞章で謡われるものは、この〈野守〉だけで、謡曲に於いて国土をどう捉えていたのかは、未確定なところがある。〈芭蕉〉においては「成仏の国土」²⁹と謡われ、「石や瓦礫も」と捉えられるより、もっと広く「仏の教えが充ち成仏できる場所」と捉えられている。「国土」という語は偈文での教理的使用意図から広がり、応用をみせ、浄土として仏の国土を想起させる。語彙としての解釈の広がりが認められる。

5. 能における「草木国土悉皆成仏」の偈の特徴

前節でみたように〈仏原〉や〈鶴〉は「草木国土悉皆成仏」の句だけではなく「一仏成道観見法界」という前句も含めて典拠からひいている。それはこの句を取り入れるに際して原典を尊重し、教義を忠実に理解しようとする姿勢の表れであり、この言葉を能に取り入れる初期の段階であったのではないか、ということが窺える。「草木国土悉皆成仏」の句が能に取り入れられる起点に近いところにある能と考える。

これらの作品の初出について、〈仏原〉は応永34年(1427)の「応永卅四年薪申楽演能記録」に初出が認められる³⁰。これは29曲それぞれの推定される初出年として最も早い年となる。〈鶴〉と〈野守〉は世阿弥の伝書である『五音』に作品名が認められる³¹。『五音』は「永享に入ってから」³²、永享二年(1430)の奥書のある『習道書』の「前後に成立した」³³とされ、1430年以前の著作と考えられる。このことから、この二作品の初出も1430年以前と推定される。三作品の作者は『能本作者注文』ではともに世阿弥である³⁴。これら三作品の周辺を起点として、この句に関わる能が作り出されていったと考える。

これらの作品をふまえて、「草木国土悉皆成仏」の偈を取り入れた能に見られる特徴を、次のようにまとめた。

5.1 草木の発心

草木成仏思想における自性、依正不二に関わる問題は長く天台本覚において論議された。先に見た〈仏原〉〈鶴〉〈野守〉の能における自性、依正不二を見ると、『中陰経』の偈が忠実に引かれ「一仏成道」という前提を踏まえて作出されている。この一仏は釈尊と捉えられ、その悟りにより他の万物が成仏するという依正不二の立場をとっての作出と判断できる。

しかしまた、能には、この句を伴って、草木の精をシテとする作品が多く創出される。シテたちは一曲における筋の展開を担い、主体的に自ら発心して行動し、心情を謡い、舞いを舞う。舞台演出として

観客の感性に訴えやすく受け入れられやすい形態への変容、創作である。桜の精が観衆に受け入れられれば、さらに藤の精、杜若の精、楓の精、芭蕉の精、柳の精などが草木成仏の詞章によって謡い出され、それは草木にとどまらず、虫である胡蝶の精、にまで及ぶ。雪の精に至っては、「草木国土悉皆成仏」の偈の通り、瓦石、土塊、までが成仏するという思想の真髄である万象万物に及ぶ仏の力、それに預かる成仏が捉えられての出現となる。万物の精霊神霊を、姿形を持って出現させ観客の視覚に訴える手法だが、同時にその姿はまさしく草木自らが菩提心を起こし、発心修行する姿となっている。

能における草木成仏の位置づけは、依正不二、自性のどちらを根拠とし、どちらが正しいかという論議の対象となる二者択一ではなく、どちらにも舞台効果、筋の展開における妙味、シテの設定において面白みが存するとなれば取り入れるという創作への食欲さによっている。舞台効果において、一曲の構築において、必要であれば、教理の違いには拘泥、固執しない。自性も取り入れ、依正不二も取り入れるという態度である。その意味で能には当時受容された仏教思想が多種多様、多岐にわたり包含されている。

5.2 悉皆成仏の契機

能における草木成仏思想は大乘的精神の発露であって、すべてを同胞、仲間、一如とみる視点にたつ。そこにおいて成仏をすすめ、願い、成仏を助けたいと祈る。そのような視点にたつ「草木国土悉皆成仏」の偈の及ぼした特徴として、女人成仏の捉え方の変容がある。

前時代に著された『往生要集』において地獄極楽の有様が活写され、多くの人に浄土への渴仰と業因縁の恐れが生じた。能においても〈求塚〉や一連の小町物における不成仏性など、業の深さにより地獄に落ちる女性の救いがたさが描かれる。それとは、対照的に〈采女〉においては、草木成仏思想は疑いもなく受容され、その救済慈悲の普遍さが讃えられている。

「草木国土悉皆成仏」に関わる女人成仏の能においては、即座に信じて、軽やかに心を切り替える采女や、喜びや思い出を語るばかりで恨みや悲哀をあ

らわさない〈半蔀〉の夕顔、自らの栄枯盛衰を悟って恩讐にとらわれない〈仏原〉の仏御前などが、シテに設定されている。この句の登場以前には閉ざされていた女人に対する成仏の可能性が、能において描かれるようになった。

「草木国土悉皆成仏」の偈を詞章に取り入れることによる成仏の意識の変容は、女人のみならず、奈落に落ちた武者亡者をはじめ、思いを残す亡霊悪鬼、〈鶴〉のシテにみる悪心化生の畜生に及び、すべてのものを成仏させてあげたいという思考が能に取り入れられる契機となっている。

他の人の成仏を願うこと自体が利他を尊ぶ大乘的仏教精神の現れであると考え。まして誰彼を問わない草木国土の万物万象の心の内を聞き、成仏を願ってシテが舞う讃仏乗の舞を見る。ワキは成仏を祈り、観衆は一体となってそこに同席する。能を見て、その舞台の演目の中にもにいるということは、この大乘的仏教精神を育むことに寄与したと考えられる。

5.3 法身説法の響き

シテの成仏を願って「草木国土悉皆成仏」の詞章が謡われる時、〈仏原〉においては野辺をわたる山風や夜嵐、虫の音が法身説法の声として感受され、〈鶴〉においても、浦々に響く波の音は法身説法の声として感受される。ありのままのこの世の万物が、そのまま仏が説法する姿だと感受され、能の舞台に法身説法の世界が構築される。舞台背景のように法身説法の詞章が響く中、「草木国土悉皆成仏」の句に伴われて、よく謡われる言葉として「疑いなし」「ありがたや」「頼もし」がある。さらに〈鶴〉では「頼むべし」なども謡われる。

謡曲では神や天女は人間を支配し世界に君臨するような絶対的な存在ではなく、むしろ人間的で身近な存在として描かれる。一見すると人間と同じような存在と捉えられるこの神天女と人間との違いはどこにあるかといえば、この「疑いなし」という点にあり、疑いを持たない存在が天女や神であり、成仏に近づくための第一歩となる。〈羽衣〉に「疑いは人間にあり」³⁵と言う詞章があり、能における考え方が窺える。「疑い」というものが神や天女と人とを分かつものであり、真理を見極めていく存在に

とって真偽は自明のことであり、悟った存在には「疑い」は無いと言うことだと考えられる。迷妄の中にいる凡夫に、この「疑いなし」という信念が断言され、真理の悟りに裏打ちされた「疑いなし」に向かって悟りの階梯を登ることが勧められる。「頼むべしや」とためらうシテに「頼むべし」と励ます言葉をかけていく。悟りに到達できない凡夫にとって「頼もし」い導きであり、「ありがたや」と感謝していく。「草木国土悉皆成仏」の偈は、この「疑いなし」「頼むべし」「頼もし」「ありがたや」の言葉とチームを組み、螺旋階段のような成仏への構造を作っていく。

「草木国土悉皆成仏」の句には、その偈文において、「身長丈六光明遍照悉能説法」³⁶の句が続いている。悉皆成仏した草木国土が、丈六の大きな仏となって遍く照りわたり、どの仏も悉く能く説法をしているという。この偈文において「草木国土悉皆成仏」と法身説法は密接に関わるものであるが、それは能の世界においても密接な関わりを持って出現している。「草木国土悉皆成仏」の句に伴われるシンプルな言葉の構造は、渡る浦風、野辺の草木、すだく虫の音、峰の嵐、谷の水音等々で構築された重層的な法身説法を表す詞章と響き合う。その謡は相互に重なり合い作用し合い、分ける事のこのできない関わり合いとなって融合している。

おわりに

『謡曲大観』に収められた235曲の能作品中、29曲で「草木国土悉皆成仏」に関連する表現が見られた。現行曲全体の中で1割強の能作品がこの思想と関連している。

その29曲の詞章に「草木国土悉皆成仏」の句がどのように取り入れられたかを確認すると、言葉を言い換えることはあっても、「草木国土」のフレーズの基軸を守る能の割合が72.45%という高い確率になっている。能における草木成仏思想の受容について「草木国土悉皆成仏」の偈が大きな役割を果たしたことが確認できる。「草木国土悉皆成仏」の偈が能に取り入れられた時期は、『三道』に29曲の作品名がないことから『三道』の奥書の応永30年(1423)³⁷以後のことと考えられる。この最初期にあ

たる応永34年(1427)以前に初出が見られる〈仏原〉には「一仏成道観見法界」という前句が丁寧ひかれており、より忠実に正確にこの偈を学び、能に取り入れようとする真摯な能作姿勢が窺える。やや遅れてなつたと推定される〈鶴〉や〈野守〉にもこの偈文は見られ、これら三作品周辺を起点として、後の「草木国土悉皆成仏」の句に関わる能は作出されていったと考える。そこに見られる特徴は成仏の可能性の簡明さ、対象の広がりであり、能舞台は法身説法場と化し、現実の事象そのままが成仏の姿であると草木国土の悉皆成仏の世界が重層的に謡われている。

仏教思想の大乗的精神の進展により、草木成仏思想は生じ、中国仏教では湛然、天台仏教では安然、さらに本覚思想では良源などにより発展し、数多の議論検証を経ていく。その過程で生じた「草木国土悉皆成仏」の偈であるが、能楽との結節点となったこの句が果たした役割は大きく、この句を通して、草木成仏・女人成仏・武者成仏・悪鬼成仏や、草木万物の精の出現を要素とする多数の能が生じた。「草木国土悉皆成仏」の言葉に集約された濃厚で莫大な思想的エネルギーが能の世界で浸透、拡散したといえる。

謝 辞

本稿は、令和2年度特定課題研究の成果としての論文を基に加筆修正を行ったものです。武蔵野大学大学院の西本照真先生に御指導を賜りました。誠にありがたく、感謝申し上げます。

注

- 1 岩見護「謡曲にあらはれた仏教思想」(『大谷大学研究年報』(7) 1954) 20頁。
- 2 英雲外『謡曲と仏教』(第一書房、1987)。
桑木巖翼「謡曲の世界観」(『能楽全書1』東京創元社、1990)。
新川哲雄「『草木国土の悉皆成仏』について——草木成仏観研究への覚え書き」(『学習院大学文学部研究年報』(29) 1981)。
- 3 姉崎正治「謡曲に於ける仏教要素」(『能楽全書1』東京創元社、1990) 86頁。
- 4 姉崎正治「謡曲に於ける仏教要素」(『能楽全書1』東京創元社、1990) 85頁～111頁。
- 5 花田凌雲『謡曲に現れたる仏教』(興教書院 1938)。
- 6 香西精『能謡新考』(檜書店、1972)。
香西精『世阿弥新考』(わんや書店、1962)。
香西精『続世阿弥新考』(わんや書店、1970)。
- 7 西尾実『道元と世阿弥』(岩波書店、1974)。
- 8 天野文雄『世阿弥がいた場所——能大成期の能と能役者をめぐる環境』(ぺりかん社、2007)。
- 9 三崎義泉『止観的美意識の展開——中世芸道と本覚思想との関連』(ぺりかん社、1999)。
- 10 三崎義泉『止観的美意識の展開——中世芸道と本覚思想との関連』(ぺりかん社、1999) 510頁。
- 11 末本文美士『草木成仏の思想』(株式会社サンガ、2017)。
- 12 宮本正尊「『草木国土悉皆成仏』の仏性論的意義とその作者」(『印度学仏教学研究』(9-2) 1961)。
- 13 宮本正尊「『草木国土悉皆成仏』の仏性論的意義とその作者」(『印度学仏教学研究』(9-2) 1961) 674頁。
- 14 宮本正尊「『草木国土悉皆成仏』の仏性論的意義とその作者」(『印度学仏教学研究』(9-2) 1961) 675頁。
- 15 宮本正尊「『草木国土悉皆成仏』の仏性論的意義とその作者」(『印度学仏教学研究』(9-2) 1961) 677頁。
- 16 宮本正尊「『草木国土悉皆成仏』の仏性論的意義とその作者」(『印度学仏教学研究』(9-2) 1961) 686頁～692頁。
- 17 花野充昭「『三十四箇事書』の撰者と思想について(四)」(『東洋学術研究』(16-1) 1977) 139頁。
- 18 宮本正尊「『草木国土悉皆成仏』の仏性論的意義とその作者」(『印度学仏教学研究』(9-2) 1961) 678頁。
- 19 拙稿「能楽における草木成仏思想の展開」(『人間学研究論集』(13) 武蔵野大学通信教育部、2023)。
- 20 『能本作者註文』に観世権守信光の作品として〈胡蝶〉がある。『能本作者註文』は観世長俊の直談を編集して大永4年(1524)に成立した。長俊の父の信光や同世代の作者付けについては客観的であり確実性が認められている。
- 21 西野春雄羽田昶編『能・狂言事典』(平凡社、1988) 127頁～128頁。
- 22 『大正新脩大藏經』(溪嵐拾葉集 光宗撰) 第76巻549頁下段22-25。(大正新脩大藏經テキストデータベース)
- 23 『謡曲集2』(日本古典文学全集 小学館、1975) 394頁。
- 24 佐成謙太郎編『謡曲大観』(明治書院、1982) 4巻2389頁～2390頁。
- 25 田村芳朗「天台本覚思想概説」(『天台本覚論』日本思想大系 岩波書店、1973) 482頁。
- 26 佐成謙太郎編『謡曲大観』(明治書院、1982) 4巻

- 2386 頁。
- 27 佐成謙太郎編『謡曲大観』（明治書院、1982）4 巻 2387 頁。
- 28 佐成謙太郎編『謡曲大観』（明治書院、1982）4 巻 2432 頁。
- 29 佐成謙太郎編『謡曲大観』（明治書院、1982）4 巻 2536 頁。
- 30 永村眞「『大乘院寺社雑事記紙背文書』が語る世界」（『能と狂言』（13）2015）。
- 「応永卅四年薪申楽演能記録」は『大乘院寺社雑時記』の紙背文書として発見され、その二月十日の条には「観世十郎 同三郎 十二次郎 自己剋至酉刻、十五番沙汰候了、」として「脇 佐保姫、観世十郎、」「第五 仏原、三郎、」と記されている。この元雅がシテを勤めた〈佐保姫〉^{*}と音阿弥がシテを勤めた〈仏原〉が、「草木国土悉皆成仏」の句に関わる能として、確認できる最も早い年の初出になる。
- この年は他にも『世阿弥自筆能本』の奥書から〈知章〉の作出が認められる。※同じく脇能である〈佐保山〉の古名、異名と考えられる。
- 31 「五音」（『世阿弥 禅竹』日本思想体系 岩波書店、1974）211 頁、214 頁。
- 32 能勢朝次『能楽源流考』（岩波書店、1979）747 頁。
- 33 鈴木正人編『能楽史年表古代・中世編』（東京堂出版、2007）44 頁。
- 34 「能本作者註文」（『謡曲狂言』国語国文学研究史大成（8）三省堂、1977）118 頁。
- 35 佐成謙太郎編『謡曲大観』（明治書院、1982）4 巻 2491 頁。
- 36 『大正新脩大藏經』（溪嵐拾葉集 光宗撰）第 76 巻 549 頁下段 24。（大正新脩大藏經テキストデータベース）
- 37 「三道」（『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店、1974）144 頁。